

論 文 要 旨

R. シューマンの《暁の歌 *Gesänge der Frühe*》Op. 133

—— 標題の象徴表現からみる作品解釈 ——

京都市立芸術大学 大学院 音楽研究科

博士（後期）課程 器楽研究領域（ピアノ）

泉 麻衣子

本論文は、R. シューマンが自ら出版に関わった最後のピアノ作品《暁の歌 *Gesänge der Frühe*》Op. 133 について、ヘルダーリンの書簡体小説『ヒュペリオン —— もしくはギリシャの世捨て人』との関係を調査し、後期歌曲との関連から作品に内包される詩的内容を解明しようとするものである。また《暁の歌》の作曲された1853年前後のシューマンの周囲の状況を通して、本作品がシューマンの後期においていかなる意味を持つかについても考察し、新たな作品解釈を試みる。

序論では、《暁の歌》作曲前後のヨーロッパ情勢及びシューマンのめざましい創作活動について述べた。デュッセルドルフの音楽監督に就任したシューマンは社会の動向に敏感に反応しながら多岐にわたる創作を行った。

第1章では、《暁の歌》の作曲の経緯と出版、被献呈者、原資料と

標題について述べた。自筆譜にはヘルダーリンにとって救済愛の象徴である「ディオティーマ」の名が記されていた。作品の被献呈者ベッティーナ・フォン・アルニムはシューマンと最後の手紙のやり取りをした女性でもある。

第2章では、《暁の歌》の特徴的作曲原理を明らかにした。作品全体は、詩的構想に基づく関連要素が暗示的また回想的に配置され、繊細に呼応し合う構造を成している。また全曲を通じて反復の原理が通底していることが大きな特徴であり、新たなる生成が内面に向かってなされている。平面的な並列的手法、立体的な音響の構造、謎めいた曖昧さ、バッハのヴァイオリン曲に倣ったポリフォニックな書法といった斬新な手法が見られる。

第3章では、ヘルダーリンの『ヒュペリオン』との関係を調査し、それをふまえて音名表象の手法の考察を行った。《謝肉祭》との比較考察により、より抽象的、内面的になった音名表象の手法において、後期における様式の成熟を見出すことができた。

第4章では、書法上の関連のみられる後期歌曲の詩の内容を考察し、詩的解釈を導き出した。諦観やレクイエムを内容とする歌曲と共通点を持つこの作品は、シューマンが生涯の最後に諦観の境地を歌った楽曲と言えるのではないだろうか。

最後に、第5章結論においてはこれまでの分析及び考察結果を総合して、標題に関する詩的解釈を導き出した。

ピアノ作品に対して付けられた「Gesänge (歌)」という題名は「歌」による編成を想起させる書法であること、また歌曲との関連を示唆するメタファーであると考えられる。

シューマンが出版者に宛てて書き記した「朝が近くなって明けていく様」に改めて照らし合わせてみると、――第1曲では世捨て人の諦観も支配するなか朝の光を求める。第2曲では、徐々に朝が明けてい

き、幸福の回想となる。第3曲では様々な戦いが暗示され、第4曲では日が翳り、死への警告が仄めかされる。終曲では、世捨て人の時点に回帰し、最後には絶望の先に希望の朝の光が差し込んでくる——と解釈できる。翻って考えてみると、「Frühe」は「初期」とも読み取られ、シューマンの人生の回想をも示唆されている可能性が見えてくる。《暁の歌》が作曲された1853年には新ドイツ楽派が台頭し、絶望に陥ったシューマンの前に若い真の芸術家たちが現れる。「新しい道」執筆の直後に書かれたこの作品はシューマンの未来へ向けた希望をもとに作曲されたと考えられるのである。また初期の作曲手法をもとに発展させられていることも「回想」の意味に含まれよう。このように《暁の歌》は、文学的なものとシューマンの実人生、そしてシューマンの様々な理念が集約された極めて意義深い作品であり、アドルノの言葉をそのまま当てはめることはできないまでも、シューマン独特の晩年を象徴する作品といえることができる。シューマンの作品研究はいまだ解明の途上であるが、本論文は作曲家の後期作品解明の一端を担うものとなるだろう。